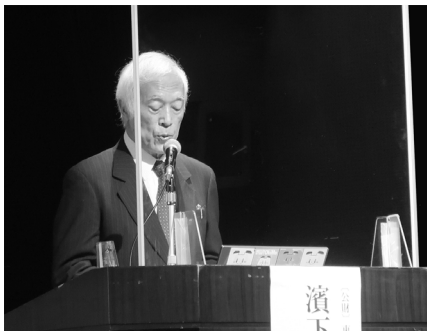
第一部

基調講演　歴代宝案から考えるグローバルヒストリー

―東アジア海域論の再構成―

濱下　武志

歴代宝案から考えるグローバルヒストリー
―東アジア海域論の再構成―



濱下　武志（〔公財〕東洋文庫研究部長）

歴代宝案編集委員（第１期～現在）

ご紹介いただきました濱下です。

本日は訳注本の記念の集まりではありますが、校訂本が完成しました時にも皆様とお目にかかる機会がございました。その時、私は 30 年間にわたって歴代宝案に関わってきたので、ウチナーンチュになる資格があるのではないかというような事を申しましたところ、そう簡単ではない、30 年では無理であるということを自覚いたしました。確かに歴代宝案の世界というのは非常に深いものがありますし、琉球・沖縄の歴史も大変長く広いものがあります。そういう点で、私は今回はウチナーンチュであることを訴えるということはやめまして、むしろグローバル・ヒストリーという歴代宝案を少し外側から見たらどのように見えるかという視点から御報告させていただきます。

史料の交流・研究の交流・人々の交流

歴代宝案は、444 年間にわたる琉球王国の外交文書であります。そういった点で歴代宝案は自らの記述、記録の世界を持っており、歴代宝案をどのように読み解くか、その内容をどのように汲み上げて歴史を考えるかということは、絶えず大きな課題としてあるわけです。つまり、歴代宝案そのものが全てを語っているわけではなく、歴代宝案の史料という枠組みの中で多くのことが示唆されているといいましょうか、直

接全面的に触れてはいないけれども、例えば東南アジアや太平洋との関係などが強く示唆されているという事がいえるわけです。

私たちには、歴代宝案の世界を考えるということと同時に、歴代宝案が外交文書として示唆しているところを、今度はどのように、歴代宝案以外の史料から考えるか、という課題もあります。

それから、もう一つは歴代宝案も幾つかの変化があります。第一集が編纂されたのは、歴代宝案の記録が始まってから 200 年も経ってからということですが、その時になぜ歴代宝案が編集されることになったのか。第一集の編纂の方法は、国王ごとの文書から始まるという、ある意味では、中国の史書でいうと紀伝体という本紀と伝記といったスタイルを踏襲しているかのように見えますが、第二集以降はむしろ編年体になっています。そこには、やはり琉球王国の、あるいは琉球の知識人、あるいは琉球で外交を担当した人たちがどのように自らの歴史を考えるか、という点に非常に独自なものを持っていたことが影響していたのかも知れません。

そういった点で歴代宝案を考える時に、今申しました三つの枠で考えてみたいと思っています。歴代宝案そのものが示唆しているものを、どのように史料として掘り起こしていくのか、時代が大きく変わっていく中で、歴代宝案が受けた影響というのがあるだろうか、という外側の問題に注目したいということであります。

宝案編集作業の特徴―語注一覧とデジタル化

まず、その歴代宝案資料の特徴について考えてみますと、これまで校訂本、今回の訳注本の編集・刊行ということを経過しまして、スライド 1 のように、解説・解題、資料の目録というものを刊行してきました。

1『歴代宝案』校訂本の特徴ー『歴代宝案』の復元
　a. 文字校訂：文字、表現、手抄本・編集本
　b. 資料校訂：原典校訂、補充・比定校訂、頭注
2『歴代宝案』訳注本 15 冊
3 解説・解題、資料目録
4 用語集
5『歴代宝案』関連資料集
　＊デジタル化　琉球王国史・近代沖縄史料デジタルアーカイブ
　　本サイトについて（ryuoki-archive.jp）
　＊沖縄県教育庁文化財課　史料編集班

スライド 1

特に訳注本では、語注という歴代宝案の言葉、歴代

宝案は外交文書であり、外交関係の言葉というのは独特なものがありますので、その言葉が非常に詳しく解説されている語注一覧ができてまいりました。そういった点で、歴代宝案の内容に私たちははるかに容易に接近することができるようになりました。

また、関連資料も編集されてきましたので、周辺の知識が非常に厚く蓄積されたことになります。

私はさらに、（これらの資料が）デジタル化されているということの特徴、デジタル化の試みが進んでいるということを特に強調したいと思います。現在、デジタル化は、社会における情報化の一つの流れであり、史料の編集や出版刊行に止まらず、史料そのものをデジタル化して公開するといった動きもあります。

そして、この歴代宝案は、編集出版をすると同時にそれがデジタル化される。そして電子史料と編集された史料が公開されるという点では、研究の上で他のデジタル化一般より大いに利用度が高くなっていると思います。

そしてもう一つ、琉球王国交流史と近代沖縄史料のデジタル化、あるいはデジタルアーカイブというものも公開されました。私自身、琉球王国の歴史と近代沖縄の歴史を一つの文脈でどのように捉えたらよいか、という課題を自分に課しております。琉球王国の時代と近代沖縄が違うという議論はよく分かりますけれども、さらにそれを一つの視野でより長い歴史で考える場合には、どのような条件、あるいはどのような新しい時代区分が必要かということも含めて、このデジタルアーカイブは大きなチャレンジであります。

したがいまして、本日私が申し上げたいことは、歴代宝案のご紹介ではありますが、これからの課題がこの編集作業を経てどういう形で示されるのか、あるいは私自身もどのように受け止めたらよいかということを考えていくことでもあります。

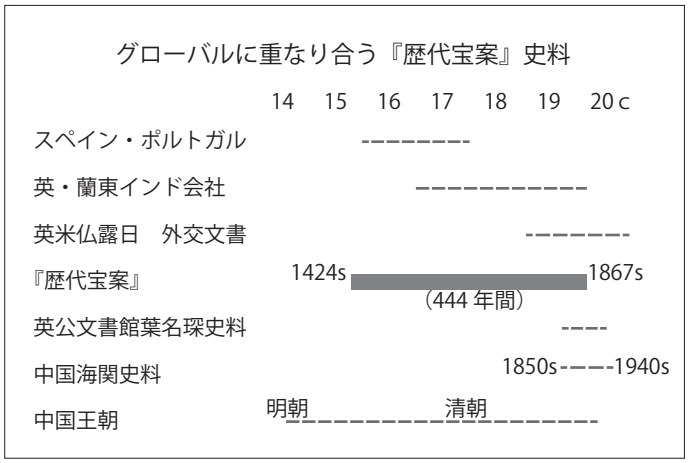
それから、最後になりますが、沖縄県教育庁文化財課史料編集班の力と言いましょうか、非常に継続的な一貫した史料の蓄積、あるいは記録化、それから編集ということへの多大な関わりに、私たちは深く感謝申し上げたいということであります。そういうことを経て今日、歴代宝案の訳注本が私たちの手元にあると言えると思います。

グローバルに重なり合う宝案史料

歴代宝案に関連する史料、あるいは歴代宝案そのものに関連するわけではありませ

んが、琉球の歴史に関連する史料は非常に多方面にわたります。

例えば、「グローバルに重なり合う『歴代宝案』史料」（スライド２）とタイトルを掲げましたが、スペイン、ポルトガルの史料から始まってオランダ、イギリスの東インド会社の時代の史料、それから欧米を中心とした、また、アジアも含めた新しい外交機関ができて、いわゆる国際関係の下でできた外交文書の中の琉球史料というものもあります。



スライド２

それから、イギリス国立公文書館所蔵の葉名琛に関する史料というのは、ちょうど第二次アヘン戦争あたりの東アジアを記した史料でありまして、これも琉球の歴史に大きな影響を与えた記録があります。

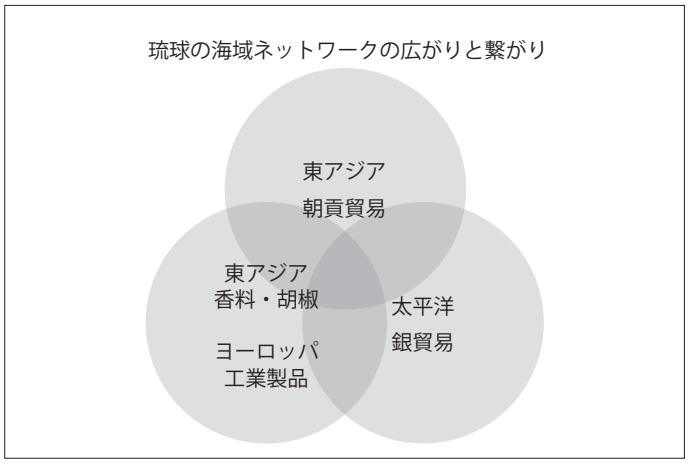
基本的には中国王朝の明朝から清朝にかけての史料は膨大にあって、今回の編集事業でも中国第一歴史檔案館、あるいは台湾の故宮博物院の資料なども参考にする必要がありました。そういう点で中国の史料というのは一つの流れとしてあるわけですけれども、しかし、（スライド２）中央に赤字（太字）で、歴代宝案 444 年間というふうに書きましたが、これだけの長期間にわたって様々に異なる史料が何らかの形で琉球に言及しているということを考えますと、歴代宝案が一つの軸となって、それぞれの時代の史料に対して何らかの区切り、何らかの問題、関わりを示していると考えております。

このような点で、本日私は「琉球の海域ネットワークの広がりと繋がり」ということを掲げました（スライド３）。一番上に東アジアの朝貢貿易、これは基本的に歴代宝案が最もよく具体的に示しているところです。

これは中国の史料以上に、朝貢貿易あるいは朝貢関係がどのように行われたかということを、非常に克明に記録している点で、やはり歴代宝案を抜きに朝貢関係というものは考えられないのではないか、と私は思うほどでありますが、この東アジア朝貢貿易ということをめぐって、東アジア海域論という視角からの議論も進められてきま

した。海域という視点から琉球の参画というものを議論してきたわけです。それに加えて、東南アジアの香料貿易・胡椒貿易にも関わっております。

それから、ヨーロッパの工業製品も、実は琉球が広州を通して朝貢貿易の中の交易品として扱っています。



スライド 3

それから、太平洋の銀貿易との関連があります。スペインのいわゆるガレオン船によってアメリカ大陸から運ばれてくる銀と中国産の生糸を交換する太平洋貿易がありましたけれども、この太平洋貿易にも琉球はフィリピンのマニラへ出かけて行く、あるいは生糸を仲介している、中継しているということを見て取ることができます。

ただ、歴代宝案に記載されているのは中国との関係だけでありまして、この部分は出てまいりません。それから、日本との関係ももちろん出てまいりません。しかし、私たちはそれらの歴史的知識を背景にして、琉球の海域ネットワークというのは、朝貢貿易のネットワークよりもより広く、より複雑で多様であるということに気づかされるわけです。

そのような点で、私は今日はこの東アジア香料・胡椒貿易、それから、ヨーロッパの工業製品交易、太平洋の銀貿易というところにも少し触れて、福州において朝貢貿易という名のもとに行われてきた国際貿易についてもご説明したいと思います。

宝案にみえる琉球の海域ネットワーク

まず、第一集という明代を中心とした記録があります。これは世界の資料の中で琉球の歴代宝案にしか記録のない歴史史料も含まれております。例えば、現在のインドネシアのジャワ島に位置したパレンバンですけれども、中国名は旧港と言いますが、そこの華人社会とのやりとりについては中国の史料にもありません。

1405 年から始まる鄭和の中東への遠征に関係する記録の中にパンレンバンが出て

きますが、琉球の広域ネットワークの背景には、その鄭和の遠征も非常に強く関係しているということが分かるのではないかと思います。

また、この『歴代宝案の栞』の７ページにここに関係する地図が出ております（スライド４）。右側の交易に関する地図を見ていただきますと、朝貢貿易というのは、琉球と明朝あるいは清朝との間の交易ではありますが、この朝貢貿易という枠組みの下で琉球は東南アジアの各地域に対して、胡椒とかあるいは蘇木という品物を朝貢品として持っていくために特産地との交易を積極的におこなうという構造があります。それが第一集の歴代宝案の中には、非常に詳しく書かれております。その点で第一集の世界というのは、琉球、もちろん東アジアとの関係も多いわけですが、東南アジアとの関係が集中的に記されているという特徴を持っております。

歴代宝案第一集の世界

第一集（1424 ― 1697 年）

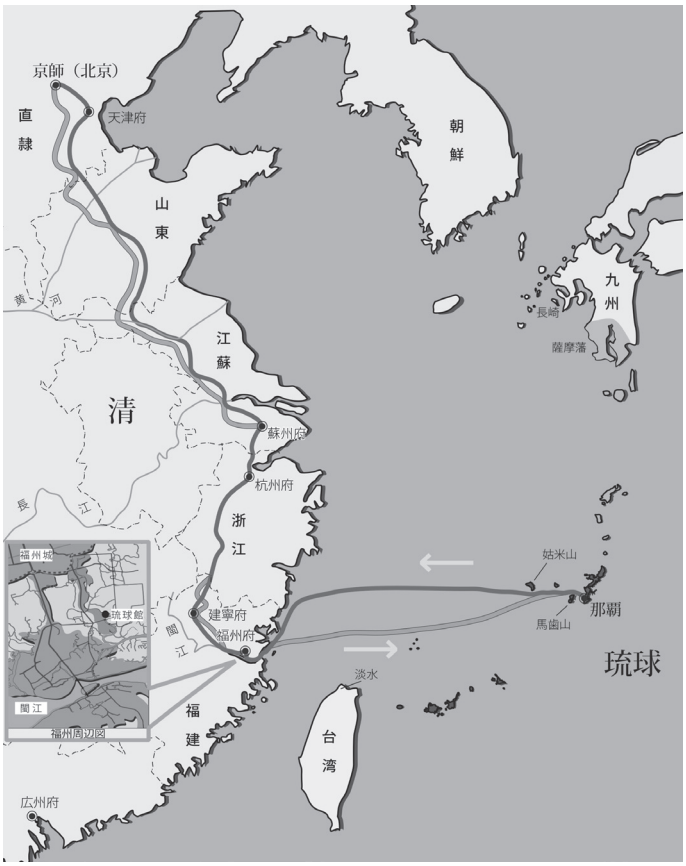
・明代に対応：文書行政（「歴代宝案の栞」5 ― 6 頁）
・東南アジア・東アジアとの朝貢貿易
・旧港（パレンバン）
・九州からの漂流民送還
・琉球の仲介
・鄭和遠征（1405 ― 1433 年）の地方記録
・旧港の華人社会とその統治

スライド４

しかし第二集では、東南アジアとの関係が見られなくなります。これはなぜ東南アジアとは交易がなくなったのかということについての研究の課題があるわけです。また、第一集から第二集という歴代宝案の編年の中で編集方法の違いがなぜ出てくるのか、あるいはどこから出てくるのかという課題があります。

この理由として、明朝から清朝に替わったということで、朝貢国相互の関係が少し厳しくなり、朝貢国同士のつながりを表面には出さなくなった、ということが一つ考えられます。

朝貢体制の下では北京に朝貢国の使節を定期的に集めるわけですが、そういうことではない状況、例えば台湾の鄭氏一族の動きなども歴代宝案には出てきますけれども、やはり明から清への交替ということも非常に大きいのではないか。第一集から第二集への変化というのは、そのような、歴史の背景の変化ということと対応しているのではないかと考えられます。



歴代宝案第二・三集の世界

第二・三集（編年史）
（1697 － 1858、1859 － 1867）

・第一集と第二集の編集の違い（「歴代宝案の栞」５－６頁）
・明から清へ：朝貢国相互の交流を制限
・台湾　鄭氏一族
・東南アジアとの朝貢関係の強化
・澳門とポルトガル
・スペインの太平洋ガレオン船による銀・生糸貿易
　『歴代宝案』を超えた空間の中の琉球海洋交易ネットワーク
・福州貿易と琉球（イギリス綿布、薩摩・日本）

スライド５

それから、東南アジアに出かけていって貿易をしないということは、例えば、マカ

オにポルトガルが入ってくる、あるいはスペインが太平洋貿易に入ってくるといった、東南アジア全体の交易だけではなく、太平洋の交易、あるいはヨーロッパとアジアの銀と胡椒の交易など、そういった交易の問題にも関係しているのではないかと考えることができます。

また、17 世紀という時代のヨーロッパに関する研究では、やはり気候変動などによって非常に経済が低調になる時期と指摘されております。それが琉球の貿易活動に影響したのではないかという点で、歴代宝案の中に見られる気候、あるいは海流など、歴代宝案の場合には台風の影響などがあり、またヨーロッパの場合にはヨーロッパとアジアの関係はモンスーン気候の変動に関係するわけです。「危機の 17 世紀」と言われているヨーロッパ史の研究が、東アジアではどう影響していたのかという課題も、第一集と第二集の編集の仕方の違いの背景として、私たちが考えることができる論点ではないかと思います。

そういった点では、歴代宝案を超えた空間の中での琉球の海洋交易ネットワークというものがこの時期にはあるのではないか、と考えております。

スペイン・ポルトガルによるアジアの交易

歴代宝案に表現された、東アジア海域論に基づく交易ネットワークを前提とした上で、そこには現われない琉球の交易ネットワークが存在しており、そこでは、ポルトガル、あるいはスペイン、あるいは中国福建省のネットワークというものが、より積極的に活用されるという現象が現われてきます。

そこで特に、私は福州貿易と琉球の関係を、琉球の朝貢貿易の枠組みとしては無論北京の交易もありますけれども、実は福州における交易が主体であった、私たちは福州貿易というものをもっと調査研究できる、すべきではないかと考えております。

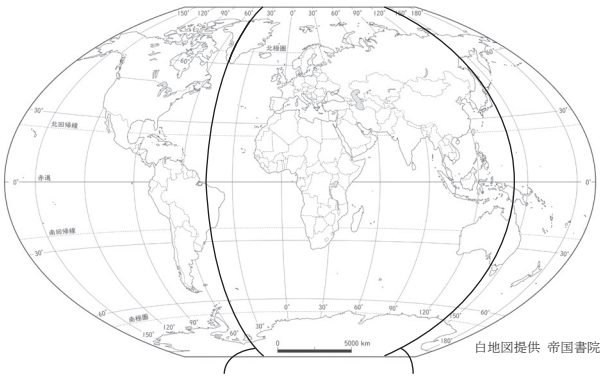
まず、フィリピンについて見てみたいと思います。スペインとポルトガルがトルデシリャス条約とサラゴサ条約という二つの条約で、世界の海洋を分割します。アジアは基本的にはポルトガルの領域です。しかし、スペインはマニラを確保します。そうしますと、スペインとポルトガルの間を結ぶ中継の交易のための担い手が必要になります。それが、いわゆる福建ネットワークといわれる福建移民のネットワーク、すなわち交易のネットワークです。福建ネットワークは日本の九州をはじめ、琉球、台湾、

それからフィリピンという、ちょうど海域をまたぐ形で、スペインとポルトガルの海洋分割の中継をおこなうようになります。そういった交易の中に、琉球の交易ネットワークの動きも関連したと考えられます。

特にポルトガルは胡椒をアジアで確保することを目指します。スペインは太平洋貿易を通して、マニラにアメリカ大陸の銀を持ってくるという形で胡椒と銀、あるいは中国の生糸と銀の交換という、一つの太平洋・ヨーロッパ間の交易関係ができてまいります。

琉球の場合も東南アジアの一般的な特産物を中国に運ぶのではなく、むしろ生糸や胡椒をルソン島に運ぶという形で、太平洋をまたぐ、あるいはより広い海洋交易に参画したということが考えられます。

スペインとポルトガルによる海洋分割とアジア・太平洋の海洋交易



1494 年のトルデシリャス条約で定められた子午線

1529 年のサラゴサ条約で定められた子午線

〈スペイン〉1545 年ポトシ銀山（ペルー、ボリビア）、
1571 年マニラ建設

〈ポルトガル〉モルッカ諸島、14 世紀末～ 1511、
マラッカ王国：1511 年ポルトガルがマラッカ占拠、
1557 年ポルトガルのマカオ進出

・マニラに拠点を置いたスペインは、アジアとの直接貿易はできなかったが、福建商人を雇い入れ、中国とマニラを結ぶ銀・生糸貿易に参加させた。

・琉球商人も、東南アジアの一般産物を中国に運ぶのではなく、生糸や胡椒をルソン島に運ぶという形で、この貿易に参加した可能性がある。

スライド６（一部改変）

マニラでの交易の記録がありますが、例えばスペインが記録した琉球に関する記録が 200 年間の中に 59 回言及されています。そこでは琉球という名称がさまざまな表現で書かれていますし、それがどこにあるかという記録もあります。

そして、交換とか取り引きの場所や、琉球は何に関わっているかという記録もあります。また、琉球列島の形と構成、生活環境はどうであるかという記録もあります。それから、日本の薩摩藩と琉球の関係についても記録があり、さらに、中国と琉球の

朝貢関係についても記録があります。そういった形でマニラを拠点とするスペインの史料の中に琉球は度々出てまいります。

そこで、例えば毎年６～８隻の琉球帆船がルソン島に寄港しているという記録について、これが完全に琉球単独の帆船であるのか、あるいは中国の帆船と一緒に来ているのかということについては、琉球単独という記録の場合と、中国船と一緒に来ているという記録の両方があります。

琉球とマニラとの交易

スペインの記録（1519 － 1738 年）の中で、琉球に関して以下の内容を含む 59 回言及

（1）琉球の名称と所在地
（2）交換・取引の場所
（3）琉球列島の形と構成、生活環境
（4）日本・薩摩藩と琉球の関係
（5）中国と琉球の朝貢関係

＊毎年６～８隻の琉球帆船がルソン島に寄港
＊琉球は日本の銀で生糸を買う
＊北ルソンに中国人と日本人がいる

出典　Emma Blair and James Robertson, ed, The Philippine Islands,（55-volumes）Cleveland, Ohio, The A. H. Clark company, 1903-09.1911. Vol.29,pp.30-31.

スライド７

そういう点では、マニラに行って銀を確保するという目的は、福建ネットワークという視点から考えれば同じということになると思います。また、琉球は日本の銀を用いて中国生糸を買うという許可をもらいます。そういった形で生糸をアジアあるいは太平洋との貿易に持ち込み、それをアメリカ大陸からの銀と交換するという関わりを持っていたと考えられます。

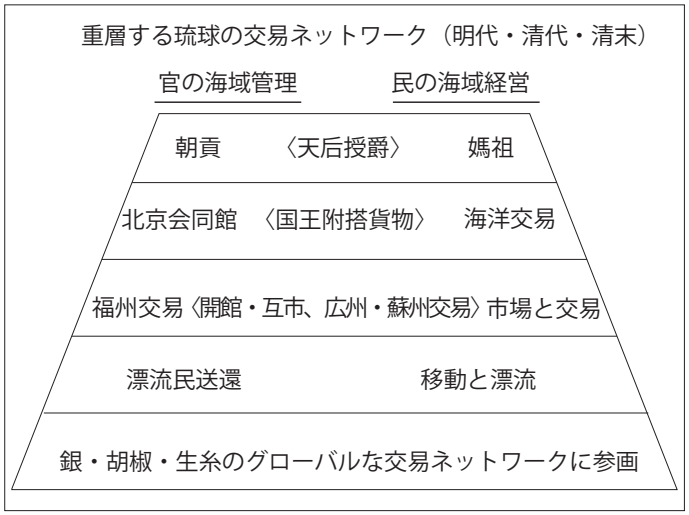
それから北ルソンには、中国人と日本人がいるという記録もあります。これは 1898 年にアメリカがフィリピンを占領しますけれども、その時にそれまでのポルトガル、スペインのアジア関係史料を編集して英語に翻訳し、全 55 冊にわたる『The Philippine Islands』という資料集が編集されます。その中には中国人のコミュニティ、それから琉球の話、あるいは、東南アジアの話がたくさん出てまいります。この資料集の刊行によって、例えば華僑・華人研究などは一気に盛んになったという経緯があります。

琉球とマニラとの往来ということは、もちろん歴代宝案の範囲には入らないわけですけれども、琉球が持って行く銀をどこで、どういうふうに調達したかということは当然、歴代宝案を読み解く中で疑問として出てくるわけですから、こういったスペインの記録、あるいはスペインとポルトガルの関係の記録から、私たちは一つの課題と

して導き出すことができると思います。

琉球の交易ネットワーク

「重層する琉球の交易ネットワーク（明代・清代・清末期）」と書きましたが（スライド８）、琉球の交易というのは広がりとして東アジアを中心とした歴代宝案の世界、さらに東南アジア、あるいはヨーロッパに繋がるような世界、それから、アジア・太平洋といった、アメリカ大陸の銀の貿易の三つの地域的なつながりであるということを申しましたけれども、交易の中身としては、並行する三層の異なるレベルの交易に関わっていた、という情況を見ることができると思います。



スライド８（一部改変）

そこでいわゆる名目的な朝貢貿易というものは、どこで、どういった役割を果たしているかということを考えてみたいと思います。

海の活用を５段階にわけてみました。海の経営では、民間の海の利用は、はるかに歴史的に古いわけですし、活動としても膨大にあるわけです。これに対していわゆる“官”が海域を管理するという方向に入っていくときには、朝貢という海洋管理の政策を実施しました。スライド８の右側に「媽祖」とありますが、海の守り神です。琉球では菩薩（フサ）という形で菩薩と重ねた媽祖がいますけれども、民間の海の守り神です。この媽祖に対して皇帝が天妃とか天后という爵位を与えて、格上げするわけです。それをきっかけに、“官”は民間の海の経営に介入するという経過があります。琉球では媽祖は６回程授爵されております。

このような海の守り神は、理念としては一番上位にあると思いますが、北京の会同館で、朝貢使節は朝貢品の取引をおこないますが、これが朝貢政策における貿易の一

部になります。また国王の附搭貨物という朝貢品が特別にありまして、国王は皇帝に対して絶えずプレゼントをおこなう、すなわち貢納するという行為がおこなわれます。これも時代によって変化があります。

それから、３番目に私が一番注目する、あるいは強調したいところは、福州で行われる交易です。歴代宝案では開館や互市とかいう表現で、市場を作って取引をおこなう。それから生糸の取引を拡大するということが要求されるということもありました。琉球としては、実質的には北京での交易よりはるかに重要でした。

また、朝貢関係を背景とした人の動きも特徴があります。朝貢関係の中では漂流した人は朝貢使節の通路を通って国へ帰すことができるという、漂流民の送還体制というものがあります。

これは多様に活用された方法でありまして、民間の船が貿易を目的として相手国の沿岸に近づき、自分達は漂流したという形で交易も行ってしまう、ということも見られます。

それから一番最後により広い交易ネットワークに参加するということにつきまして、まずいわゆる朝貢品、朝貢貿易です（スライド９）。琉球から、決められた朝貢品として例えば硫黄あるいは胡椒や蘇木などといった日本産あるいは東南アジアの特産品があります。それから、右側の表ですが、琉球国王からの特別の貨物（附搭貨物）として、蘇木、錫、銅、胡椒というものが継続して送られています。それが第一集の後

北京の朝貢貿易：福州と北京の往復

	琉球からの朝貢品								
	馬	硫黄	刀剣	象牙	香料	丁香	擅香木	胡椒	**蘇木**
1476	15	20000	＊	200	300	200	200	1000	
1529	4	10000							
1571	4	10000	＊		100				**1300**

琉球国王からの付搭貨物			
蘇木	錫	**銅**	胡椒
8000	500		1500
	1000	**1000**	
2000			

〈明清交代期〉
1638　蔡堅６回目の進貢使節、福州で白糸を納税買付の許可

	琉球からの朝貢品		
	馬	硫黄	**貝**
1644	10	20000	**3000 個**

琉球国王からの付搭貨物
夏布
200 反

単位：斤、1 斤 =600g、**太字**は初出の品物

スライド９

ぐらい、明清の交替期に大きく変化します。

例えば、1638 年に蔡堅が 6 回目の進貢使節の代表となった時に、福州において生糸の納税買い付けという形が許可されます。これは、税金を払うから生糸の買い付けを許可してほしいという要求が認められ、生糸貿易が拡大します。

これらの動きを考えますと、朝貢という貿易は固定しているのではなく、時代によって、全体の交易関係の変化の中で変わっているということがわかります。

琉球の福州貿易／朝貢貿易の中心部分としての福州貿易

最後の説明の部分ですが、ここが福州貿易として朝貢貿易全体の中で特に注目している部分です。1851 年に福州のイギリス領事の報告の中で、琉球がどのような交易品を買い付けているかという非常に細かい統計史料があります（スライド 10）。

琉球の福州貿易：1851 年イギリス駐福州領事報告

1 北京への使節派遣と福州貿易を区別
2 福州から牙行を派遣して蘇州と広州での買い付け
3 広州でイギリス綿布・東南アジアの特産品の買い付け、蘇州で絹の買い付け
4 牙行への支払いは金と銅
5 銀・胡椒・生糸
6 スペインとポルトガル

スライド 10

まず、琉球から北京への使節派遣と、福州の貿易は区別されて考えられています。福州の貿易では牙行という中国側の商人グループを蘇州と広州に派遣して買い付けを行っています。つまり広州ではイギリス綿布を買い付ける、それから東南アジアの特産品も買い付ける、蘇州では生糸を買い付けるという交易をおこなっていることがわかります。

このように、これまでは琉球から東南アジアへ派遣して交易をしていた蘇木とか胡椒を広州で買い付けるようになりますが、この変化はポルトガル、スペインが東南アジアに進出した後に変わったのではないかと思います。

それから、新しい動きとしては、イギリスの綿布を広州で買い付ける、牙行への支払いには金と銅、この金は日本の小判であること、それから銅も日本の銅銭であります。これは明らかに薩摩との貿易のために買い付けに出向いてる、ということになると思います。

それから、ここ（スライド 10）に銀・胡椒・生糸という、重要な国際商品をどのように扱っているかということをみてみると、ポルトガルとスペインとの分立を中継ぎするという動きがここではっきりしていくということになります（スライド 11）。

もう少し内容について説明しますと、イギリス製品を買う、そして、中国製品も買う、これらは漢方薬・水銀、おもに生糸です。それから外国製品、特に東南アジア産の品も買い付ける。これは中国国内経由の広州貿易です。すなわち福州の中国商人グループを広州に派遣し、イギリス製品、中国製品、それから東南アジアの製品を買い付ける、そういう交易方法に変わっていきます。

また、蘇州に派遣した商人グループは、国王のための高級生糸製品、絹織物の購入を行っています。さらに当時は上海でもイギリス

1851 年琉球の福州貿易品一覧（1）

1 広東貿易（福州経由の）a 広州からジャンク、b 広州から潮州まで陸路、潮州から福州までジャンク
a イギリス製品・広幅・長寸の綿布
b 中国製品：漢方薬材・水銀・高級生糸
c 外国製品（東南アジア）蘇木 20000 斤、人参

2 蘇州交易と上海交易（福州までジャンク）
a 金紗ちりめん・絹織物・繻子（しゅす、サテン）
b 国王のための購入品20000ドル：扇子・絨毯・茶・朱色の染料
c 蘇州と共に上海でイギリス綿布を買い付け（福州へジャンクで）

スライド 11

1851 年琉球の福州貿易品一覧（2）

3 福州での購入品
a イギリス製品：綿布
b 中国製品：福建紙・油紙・白砂糖・竹細工・紅茶・緑茶・線香
c ツバメの巣
4 国王と王府のための購入品 10000 ドル：砂糖・漢方薬
5 琉球側の購入資金：純度の高い日本金貨・銅貨（薩摩貿易）
6 牙行に高額の手数料を支払う。

スライド 12

1851 年琉球の福州貿易品一覧（3）

7 牙行（特許・独占商人）を用いた買い付け
a 福州の 10 の牙行のうち一つは琉球貿易を専門に担当
b 広州の牙行、蘇州の牙行、上海の牙行を利用
c 他に広州－厦門、広州－潮州、上海－福州の間でジャンク船を利用
8 イギリス側は琉球側と接触を試みるも拒絶される。

（注）出典：Chas. A. Sinclair at Foochow : British Consulate Foochow, to Plenipotentiary（18, June, 1851, FO228/128,pp.72-82）
このイギリス側の資料は、『歴代宝案』第２集　第 192 巻　第 21 号文書（校訂本第 14 冊、140 － 143 頁）咸豊２年５月８日付文書の内容の一部に対応すると考えられる。

スライド 13

綿布を買い付け、そしてジャンク船でそれらを福州に運んでいるという記録があります。

イギリス領事が、なぜ琉球の朝貢貿易についてこれだけ詳しい品目がわかるかということは、恐らく常関といわれる中国側の税関の記録を福州のイギリス領事が調査した結果だろうと思います。

琉球の海洋交易ネットワークの三層構造

1 東アジア海域から見る朝貢関係の中の『歴代宝案』の世界
2『歴代宝案』の世界が示す多様な海洋交易ネットワーク
3『歴代宝案』が示唆するローカルとグローバルな海洋交易ネットワーク（広州でのイギリス綿布の買い付け、日本との取り引きと福州での買い付け、マニラでの銀の取り引きなど、ローカルとグローバルなネットワークに参画する）
＊琉球＋マニラ銀貿易
＊琉球＋広州貿易（東南アジア・ヨーロッパ交易）
＊銀の流通。生糸の流通　乾隆 28 年 10 月土糸 5,000 斤、二蠶湖糸 3,000 斤
＊東南アジアの特産品（胡椒・蘇木）の取り引き、広州・上海を介したイギリス綿布購入

スライド 14

福州を拠点にして、琉球は福州の商人グループに依頼し、彼らを広州と蘇州に派遣してイギリス製品、東南アジア製品、それから生糸も買い付ける。ですから、これは朝貢貿易というよりも、朝貢という枠を利用した国際貿易であると見ることもできるのではないかと思います。

また、福州で福建の特産品である砂糖などの商品の買い付けをおこなう、そこでは日本の金貨、銅貨を使っているということから、薩摩の関与も考えられます。

この 1851 年に、イギリスは琉球使節と面会を求めます。しかし琉球使節はこれを断っています。これは外交関係においては、琉球はイギリスと交渉するということは全く考えていない、ということをはっきりと示したものだと思いますので、琉球の外交的な位置がとても明確に認識され、また対外的にも示されていると思います。

まとめとしては、琉球の交易ネットワークというのは三環（三層）の構造をもっている、ということがいえます。第一層は、東アジア海域という環境条件からの、いわゆる基本的な朝貢関係の中の交易です。第二層は、それに加えて歴代宝案の世界が示す、特に第一集が示す海洋交易のネットワークです。そして第三層は、それからさらに歴代宝案が示唆するローカルとグローバルな海洋交易のネットワーク、という広がりを持っています。この三層（三環）の関係を、私たちは琉球の交易ネットワークのなかで見ることができると思います。

歴代宝案は、第一層、第二層についての明確な歴史記録でありますけれども、第三

層のより広い広がりの中では、これは歴代宝案の役割を超えていますが、琉球のネットワークとしてはグローバルの視点から見ますと非常に重要だったと思われます。

宝案から導かれる今後の課題

琉球の交易ネットワークは、①グローバルな胡椒、生糸という流通ネットワークに参画していくという特徴があり、②明清の交替期に朝貢関係を活用した東南アジアや東アジアを股にかけた多様な交易ネットワークを形成しており、③アメリカ、ヨーロッパとの交易、太平洋・アメリカ大陸の銀貿易にも対応していく、という３項目にまとめられると思います。

まとめ『歴代宝案』から導く琉球・沖縄史研究の新たな課題

1 グローバルな胡椒・生糸・銀の流通ネットワークに参画
2 明清交代期、朝貢関係を活用した東南アジアと東アジアの多様な交易ネットワークの形成
3 アメリカ大陸・ヨーロッパとの交易－アメリカ大陸の銀貿易への対応
4『歴代宝案』から導き出す社会・生活・言語文化・海洋気象・衛生・疫と病等の課題
5 琉球の歴史文化・海洋文化の研究（媽祖と天后信仰圏（GIS）など）
6 19 世紀中葉の東アジアの変化：朝貢貿易から税関による貿易管理への移行問題

スライド 15

また、歴代宝案から導き出されます社会・生活・言語文化・海洋気象・衛生・疫と病というような社会生活に関する課題、今までの研究課題では十分取り組んでこなかった気候の変動や、海流の課題などがあり、特に朝貢使節の話ですけれども、医療や疾病問題なども検討課題としてあるのではないかと思います。

今日は必ずしも全面的には申せませんでしたが、琉球の歴史文化の中の海洋文化にみられる媽祖、あるいは天后・天妃信仰圏など、海を基盤にした、海に基づいた琉球文化、あるいは島嶼文化という海洋文化を歴史的に考えるということも、“琉球”と“沖縄”の歴史をつなぐという課題への取り組みの一つになるのではないかと思います。

19 世紀中葉以降の東アジアの変化を見ますと、朝貢貿易から税関による海洋貿易管理への移行という動きが中国にも起こりますし、日本にも起こりますし、朝鮮にも起こります。そのような点で、琉球の朝貢貿易の終わりという問題を、今度は東アジアの朝貢関係から税関による海洋管理への転換、アジアの海洋利用と海洋管理の変化という歴史的文脈のなかで位置づけるという課題も導かれます。そこで初めて琉球対

日本という関係だけではなく、中国や朝鮮の動きも、グローバルな歴史の流れの中で考えることができるのではないかということであります。

ご清聴ありがとうございました。